

高架下の天使たち

添見奏音

目次

一	出会い	6
二	心の闇	35
三	過去	74
四	再会	107
五	新しい生活	135
六	試練	170
七	再出発	197
八	それぞれの幸せ	223
九	転機	262
十	そして	311

とある町のJRローカル線。

昼間でも薄暗い、駅の高架下通路。

駅の表と裏とを行き来するための通路だが、足早に行き交う行人の他に、壁際に座って弾き語りをする者、ラジカセの音楽に合わせて仲間とダンスの練習をする者、ただ目的もなく集まってくる者たち――。

さまざまな人たちが毎日ここにやって来ては、それぞれの時間を過ごす場所でもあった。

通勤ラッシュの時間帯も過ぎ、人の歩みが緩やかになってきた頃。

通路の一角で群れる、五、六人の若い男たちの姿があった。皆、二十歳前後に見える。昨夜も同じ場所で見かけた顔だ。家にも帰らず、ここで一夜を明かしたのだろう。

「見たかよ、あん時のヒロシのツラ」

「マジだっせえ」

「でさ、トオルのやつがさ……」

彼らは地面に座って通路の一角を陣取り、大声で他愛もない話をしながら、それぞれに思い

思いの食事をしている。通路を曲がった角のコンビニで買った物のようだ。

通行人は見向きもせず、若者たちの傍を通り過ぎていく。この通路では日常茶飯事の光景なのだろう。

彼らの一人、少し伸ばした黒髪にニット帽をかぶった青年だけが、他の仲間たちとはどこか異質な存在に見えた。すらりとした華奢な長身と、色白で繊細な顔立ちには、思わず手を貸してしまいたくなるような、頼りなげな印象があった。

青年は仲間たちの会話に加わるでもなく、紙パックの牛乳にさしたストローを口にくわえたまま、前を歩いている二人連れの小学生を虚ろな目で追っていた。

小学生の一人が、新品のゲーム機をもう一人に自慢そうに見せびらかしている。「すごいじゃん。買ってもらったのか、それ」

「いいだろ、限定モデルだぜ」

「オレにもかしてくれよ」

「イヤだよ、お前すぐこわすだろ」

小学生の会話を聞きながら、青年の脳裏に別の声が響いていた。

——情けをかけてやったのに。

「拓深、なに見てんだよ」

仲間の一人に声をかけられて、はっと我に返る。

「別に……」

「今夜はバイト入ってるから忘れずに来いよ。お前、シフトとかちゃんと見てねえだろ」

「今日のは行かねえ、気分やらねえし」

無気力な声で答える青年。

「お前、もつと真面目にやれよ。俺のおやじの店だから、クビにされずに済んでんだぞ。自分で仕事探せるのか？」

「うるせえ！」

青年の怒鳴り声に驚いた別の仲間が、二人の話に割り込み、

「もう行こうぜ。拓深は今日も、虫の居所が超最悪」

そして仲間たちはゲラゲラと笑いながら、その場から立ち去っていった。

一人残された、拓深という青年。

「……うるせえんだよ、人を見下しやがって。お前らなんか、別にあてにしてねえよ」

こみ上げてくる苛立ちに、握りしめられた牛乳パックから中身がこぼれ出す。

拓深の心を苛立たせているものは、一体何なのか。仲間とも無防備に交わり合おうとはしない。

いつしか拓深はぼんやりと、遠い日の記憶の世界に入り込んでいった。

まつもりたくみ
松森拓深は、父と母との三人家族だった。